

学位論文概要書

本研究は研究方法として教材研究を思考するのではなく、研究対象としてそれを思考するものである。この教材研究という行為は、教育現場における優れた指導実践を実現するために必要不可欠なものである。これは、我が国の教師文化に深く根付いており、ほぼ全ての教員が多かれ少なかれ実践しているものである。しかし、文化的行為として深く浸透していることと、その方法や機能が正確に把握されていることとは別である。得てして我々は普段当然のように使用している言葉ほど、その厳密な定義や使用方法を明確には把握していないものである。教材研究も決して例外ではない。古くから多くの教師により実践されてきたにもかかわらず、「教材研究とは何であり、如何になされるべきか」という基本的な問いに十分な答えは存在していない。特に、本研究で着目したのは教材研究の方法である。これは教員志望学生や若手教員から「教材研究の重要性はわかるが、どのようにすれば良いかがわからず、実践することができない。」といった相談を度々受けたことによるものである。実際、現在の教材研究の方法は個々のセンスや経験に依存している部分が大きく、その方法が整理されているとは言い難い。優れた授業者にとって当たり前の教材研究方法であっても、それが明文化され整理されなければ我々の共有財産とはならない。このような状況では、いつまで経っても「今の若い先生は、教材研究が出来ていない」という声が出続けることと予想される。そのため、教材研究方法について研究を進め、このような現状を改善していくことを目指している。本論文では、伝統の中で培われてきた考え方や方法の整理と、更なる可能性の探究を行っていく。

本研究の課題を一言で言えば、先にも述べた通り「教材研究とは何であり、如何になされるべきか」を明らかにすることである。そのために、より具体的な研究課題として「教材研究の定義を明確化すること」・「教材研究の方法に関する先行研究を整理すること」・「教材研究の新たな方法を探究し提案すること」の3つを定めている（いずれも算数・数学教育を前提とし、その中で行われる教材研究について思考したものである）。また、これらの課題について思考する中で、これまでの研究では教材研究の（結果ではなく）プロセスの伝達が十分に行われているとは言い難い現状があることがわかった。そして、教材研究方法を捉え記述・整理・伝達するための論理的な枠組みの必要性が明確化された。そこで、本論文では先行研究を基に、教材研究方法を表現するためのモデルと、それに沿って方法を記述・整理していく枠組みを構築している。また、この枠組みを用いて、先行研究の一部と「否定利用に着目した教材研究」・「定理の導出に着目した教材研究」の2つを整理し、これらを一つの教材研究方法として位置付けた。同時に、枠組みの性質・可能性等についても考察し、今後の教材研究方法に関する研究に対し指針を与えた。本研究の主な成果・独創性は、「教材研究方法」研究の基礎を固め、教材研究方法を捉える枠組みの必要性・構成方法・具体例を示した点にある。